
碧陽学園生徒会異文録 ～生徒会の天災～

テツオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

碧陽学園生徒会異文録 ～生徒会の天災～

【Nコード】

N1349S

【作者名】

テツオ

【あらすじ】

私立碧陽学園生徒会。選ばれし者のみが入ることを許されるそこでは、毎日毎日駄弁るばかりの日々が展開されている。

ロリっ子生徒会長、桜野くりむの双子の兄である桜野八月を主人公に、生徒会の日々を描きます。

初投稿なので、酷評は勘弁ね？感想や、オリ話の意見はいつでも待ってます！

四月七日タイトル変更しました。

【存在しえないプロローグ】（前書き）

はい、始めました【生徒会の一存〜碧陽の天災〜】。

まずは注意をば。

この小説は原作通りに進みますが、ときたま作者がやりたい話をやりたいときに放り込みます。

原作の【存在しえない〜】は、最初以外ありません。《企業》関係は全部杉崎君がやってくれますから。

そしてオリ設定やらオリ話やらも多めにする予定です。それ以外は基本原作準拠です。

投稿スピードは週二〜三回、一回の投稿で原作の一話分を目標に頑張りますが、あくまで目標ですのであしからず。

では、どうぞ〜。

【存在しえないプロローグ】

ルール 1 神の存在を受け容れる

ルール 2 彼らに直接触れてはいけない

ルール 3 友達の友達は我ら。それが干涉限界

ルール 4 《企業》の意向は何よりも優先される

ルール 5 《スタッフ》は、個人の思想を持ち込むな

ルール 6 情報の漏洩は最大にして最悪の禁忌である

ルール 7 我らが騙すのはヒトではなく神であることを忘れてはならない

ルール 8 このプロジェクトに道徳心は必要ない。全ては《企業》の利益のために

ルール 9 性質上、《学園》の《保守》は最大の命題である

追加ルール 今年の生徒会には気をつける

【第一話「駄弁る生徒会」】（前書き）

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

杉崎鍵の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例……ジュラルミン』

真儀瑠紗鳥のコメント

正解だ。合金なので『鉄』はいけないのだが、さすがは優良枠というべきか。というか私は一応国語教師なのだが、これは給料とは別に金が出るのか？

桜野くりむの答え

『問題点……火にかけたこと』

真儀瑠紗鳥のコメント

なあ、桜野。鍋というものが、一体何のために存在するのか、一度お前の兄に聞いてみてくれ。

椎名深夏の答え

『合金の例……全人類の夢！オリハルコンを使えば全て解決！』

真儀瑠紗鳥のコメント

全人類の夢を調理用具に使うな。

【第一話　駄弁る生徒会】

今俺は、かつてない程の興奮に襲われている。

握る拳は汗ばみ、心臓の鼓動は早まるばかり。

聴覚のみに意識を集中し、他の全てを外に追いやる。

耳から飛び込んでくる情報に、ただただ俺は自分を信じることしか出来ない。

そして、訪れる決着のとき……。

『チープ速い、チープ速い！さすが前期二冠のチープインペスト！二番手ハリーレンダーとの差がグングン伸びていく！このままチープインペスト逃げ切るかああ……お？』

クソッ！やっぱり、やっぱりダメなのか？いや、何か実況の様子がおかしいぞ！？

『ん？んんんー！？おーっと！ここで一気に追いついてきたあ！速い！速いぞ！こういうことだオグラカップ！どんどん！どんどん！どんどん！追いつけるう！……遂にトップに躍り出たのは今期未だ勝ちなしのオグラカップ！オグラカップ！そしてそのままああ！誰が予想し得たのか！？チープインペストを下したのは、なんと人気最下位のオグラカープ！……』

「大穴キタ

」！

誰が予想し得た！？フッフッフ、フハッハッハア！！俺！俺がしてたさ！！やったぜ、やりやがったぜオグラカップ！！オグラ・

チープ・ハリーの三連単がはまって、それに五万かけたから・・・
・・・スゲーよ！五万が百五十万越えに大化けだぜYA
H A A A A A！！これでここ一週間負けてた分の百万一気に取り返
したぁ！！

「クツフツフツフツ・・・クハハハハハ・・・ハーツ
ハハハハハア！！」

「桜野、そんなに面白いのか？」

「へへへ・・・うひゃ！？ごかいでふ！パラパラ漫画なんて
書いてましえん！」

「大丈夫よアカちゃん。まったく誤魔化せてないし、桜野は桜野で
もリー君のほうだから」

「はーくん・・・またですか」

何やら右からマイシスターたちの吆きが聞こえるが、そんなの気に
してられない！久々の万馬券だぜ！？笑いが止まんよ、換金する
までは！！　フハハハハア！！

「ああ、面白い。今の俺はさいつこうにハイって奴さぁ・・・」

「ちよ、はーくん！」

「そうかそうか、それはよかった。ところで、数学の問題のどこに
高笑いできるところがあるのか教えてほしいのだが？」

「そりゃあオグラが・・・は？」

「はぁー・・・」

「オグラが・・・何だ、桜野」

タラーと汗が額を伝う。ギギギと顔を上げてみれば、青筋を浮かび
上がらせ、満面の笑みを浮かべた修羅コシラがそこにいた。

「放課後指導室に來い」

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアア！」

「あー、えらい目に遭った……」

何とか死地から生還した俺は、満身創痍の体を引きずっていた。

「にしてもゴリ岡のヤロー、可愛い生徒にサブミッションかけるかフツー？純然たる体罰だぜコノヤロー、………テデ」

そんな俺は現在生徒会室を目指している。こう見えても人気投票で入った唯一の男子なんだぜ、俺？

でも今更だけど、俺そこまでイケメンじゃないんだがなあ。それともこの学園にや物好きが多いんかねえ。

前に知弦にそう言ったら「あなたは世間の男の九割を敵に回したわよ」だと。意味わかんね。

まあ、妹くりむが会長になった今年は、優良枠使っても入ろうと思ってたから、ちょうどよかったといやーちょうどよかったんだが。

【人氣投票】・【優良枠】

この聴きなれない単語を理解するには、まず生徒会選挙について説明しなければいけない。

碧陽学園の生徒会役員の選出方法は、他所と比べても一風どころか五風六風変わつてゐる。

普通の高校において選挙をする場合、基本は立候補者を対象にした全校生徒の投票だろう。名前を直接書いたり紙に〇書いたりするア

レ。

しかし碧陽学園では、選挙活動どころか立候補すら存在しない。純粹な人気投票なのだ。で、さっき俺がイケメン云々言ったのもそれが関係する。

結局この方法だと、選出されるのは圧倒的に、可愛い女子がほとんどなのだ。何でかって？

まず男は可愛い子が好きだろ？これで票の半分確保。で、美少女とか綺麗な女性つてのは、基本性格さえよければ女受けもいい。

だが男はそうはいかない。顔がいい男なんて、よっぽどじゃなければ同性から反感を買うもんだ。その点俺は自分で言うのもなんだが、男から結構支持がある。でも顔はそこまでだから通るはずがないはずなのだが、……ホント何でだ？

で、まあ話は逸れたが、俺みたいなフツメンで、生徒会に入りたい奴はどうすればいいのか？そんな救済措置が優良枠。要するに選ばれし者の聖域サンクチュアリに入りたけりや賢くなれや、ってことだ。

各学年で主席になった人に権利が与えられ、望みさえすれば生徒会の一員。だが基本そういう人は、勉強でいっぱいいっぱいなので、滅多に適用されないらしい。

それで何で俺が生徒会に入ろうかと思ったかといえば、ひとえに我がまま姫のお守り。この一言で済む。

その点、知弦を筆頭にアイツの扱いが上手いのがいて、なかなか楽にさせてもらってるから、今年の生徒会は素晴らしいと思う。強いて言えば、妹に言い寄るバカが一人増えたのはいただけながな。ハーレムハーレム言わない一途な奴なら、俺だってこんな気苦労しなくて済むんだが、アイツはその辺りは改める気はないらしいし、今年一年何とかくりむだけでも守り抜こうと誓った高三の春。

「あー、やっとついたぜ………」

もたれかかるようにドアノブに手を伸ばす。

「わりい遅れ」

「・・・・・・あー、杉崎を一番惨いバッドエンドに送りたい」

「何があつた!？」

入って早々の呪言に旋律を隠せない。くりむの目に深淵の闇が宿つてます先生。

「あ、兄貴」

「今日は遅かったですね」

「八月先輩聞いたぜ。また授業中に競馬聴いてたんだって？」

「八月先輩も懲りませんねー」

「リー君って、何気に危ない橋を、全速力で走り抜けてるわよね」

「それが俺の生き様だからな。・・・・・・いやいやそうじゃなくて、何でくりむは、んな物騒なこと口走ってんだ？」

すでに戻ってはいいるが、さっきのくりむは怖かった。

すると知弦が説明してくれた。

ほうほう、くりむ相手にセクハラ連発の末に嫉妬深いなどと抜かしたか小僧。

「は、八月先輩から黒いオーラが！ま、まあとにかく俺が一番恐怖するのは会長が言ったとおりのことなんですよね」

「ん？どういうことだ」

「逃げたな」

ボソッと深夏が呟いた。まあ追求は止めといてやるわ。感謝しろよ杉崎。

「つまらない人間になる。．．．．つまり、恵まれた環境にいても、それを恵まれていると思えなくなること、というんでしょうか。今の話でいけば、俺は今．．．．生徒会に入ってまだ一ヶ月たる今は、このハーレム状況が楽しくて仕方ないっすけど。いつか．．．．いつか、この状況をあたり前とを感じるようになったら、と思うと」

「俺を無視したうえでハーレムと抜かしたのはムカついたが、まあ分からねえことはねえな」

「そうね」

俺の意見にくりむも賛同の意を示す。杉崎の物珍しいものを見るような視線を受けて、くりむは嘆息した。

「そういうのは、気をつけてどうこうなることじゃないからね。生活ランクと同じよ。一度裕福な生活をした人間は、たとえ収入が落ちても、今の生活基準をなかなか下げられないのと一緒に」

「また、えらく美少女ロリ学生らしくない例出してきましたね」

「まあ、うちがそうだったからな。うちの親父経営者だから、良くも悪くも浮き沈みの激しい生活つつうか」

「うん。兄貴の言うとおり」

「なるほど。それで会長は、美少年を金ではべらす趣味が未だに止められないと」

「そうなんだよ。毎日男をとつかえひつかえ。ご近所からの目も考えてほしい」

「杉崎と一緒にしないでよっ！てか兄貴は何悪乗りしてるの！？私悪女じゃない！」

「そして、男の頬を札束でベシベシ叩く性癖も、変えられないと．．．．」

「しかもその札束は使い回しだから、結局少年たちは叩かれ損と．．

・・・」

「スケールの大きい貴族かと思つたら、とんだドケチね!？」

「貧乏な今は、家に侵入してくるアリの手足をもぐことだけが生き甲斐・・・と」

「補足すると、ナメクジに塩をかけて縮んでいく様をただひたすら、時間を忘れて眺めるのが趣味だ」

「もうただの根暗女じゃない私! お金とかそういう問題じゃないじゃない!」

肩で息をするくりむ。まあ悪乗りはしたが、たしかにそこにある幸せに目が行かず、上に上に進んでいったら、いつかは「つまらない人間」になるのかもな。

「ま、真冬は、そうなりたくないですけど・・・でも、どうやったら、そうならずにいられるのか、よく分かりませんね」

「あー、まあむずい話だなそりゃ」

「むずい・・・ですか？」

俺の独り言に真冬が反応した。

「ん? ああ・・・。人間なんて、上に進むことでしか実感を
得られない、つてのがほとんどだし。その最たる例が出世だろ? つ
まるところ、よつぽど出来た人間でもない歯止めは効かねえんだ
よ」

「最終的には《悟り》とか、そういう精神的な極みの境地に至るし
かないってことよね、リー君が言いたいのは」

「そういうこっちゃ」

「えー、なんかつまんねーな、なんかそれ」

むくれる深夏。まあ、こいつはそういう人種か。悟りどころなん

て気にせずマイペースに生きていく、そんな人種。

「ま、一部の人間……勝ち組と呼ばれるような人は、どんな上に行き続けるけどね。大概の人間は、どこかで妥協して、そこそこ幸せにやるのよ」

「そこそこ幸せに……ねえ」

何やら思案顔の杉崎。知弦の意見もまた真理。だが真理なんてのは一つの時もあるし人の数だけあるのも珍しくない。突き詰めればそいつが信じるものが真理……なんてな。

「駄目だな」

「え？」

突然の杉崎の呟きに、全員杉崎を見る。そしていきなり立ち上がった杉崎。

「俺は美少女ハーレムを作る！」

どかーん！と戦隊物とかなら後ろで爆発が起きそうな感じで高らかに宣言する杉崎。しかしメンバーの反応は冷ややかだ。「や、海賊王になるみたいなのりで言われてもな……」と深夏は呆れ、他も「またか」と冷ややかな目で彼奴と眺める。でも一切態度を変えない辺り……どうでもいいけど、メンタル強ええなこいつ。

「妥協するにしても、俺は高いところで妥協してやる！美少女をばべらせて、いつか、『あー、美少女にも飽きたな』って言えるところまで上がってから、妥協してやる！」

「なるほどね。とりあえず行くところまで行ってみようってことね。」

いいんじゃないかしら。好きよ。そういうの」

ホント、こいつ分かんところでポイント稼ぐよな。椎名姉妹も笑ってるし。卒業式直前には、リアルにここの女子全員攻略し終わっちゃうんじゃないかしら？ま、くりむはさすがな！
そのくりむはというと。

「えー、あんまり頑張るのは疲れるよう」

うん。やっぱり駄目な子だわ。現状に完全に妥協してる。スナック菓子を頬張りながら、幸せそうだ。
そして食べ終わって一言。

「とうわけで、今日は解散しますかあ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

全員の思考が、『桜野くりむは駄目人間』、で一致した。
さて、今日も仕事頑張るとしましよい。

「八月先輩、別に俺に付き合わないでもいいいんすよ？」

書類を片していく俺達。不意に杉崎がそんなことを言った。

「ん？今更何だよ？」

俺は書類から目を離さず返事だけする。こいついつときは本当に自分の能力が便利だ。

「いや、これは俺の仕事であって別に八月先輩は……」

「気にすんな。お前は椎名姉妹の分、俺はくりむと知弦の分。そう分けてんだ妹と親友の尻拭いは俺の役目だからな」

「……そうっすね。じゃあ先輩、妹さんを「死ねカス」酷い！？まだ言い切ってないし！」

「妹に近づく害虫駆除も俺の役目だ。それも重要なな」

「いいっす。いつか絶対認めさせてやりますから」

「ならハーレム目指すのやめろ。それ以外は買っただぜ、お前のこと」

「先輩は俺からハーレムを抜いたら何が残るか分かって言ってるんですか！」

「成績は学年一位で、絵師さんのおかげで顔もそこそこいい、運動も出来る、ハイスペックな高校二年生」

「意外といいもん残ってますね」

「だが現状のお前は、マイナスの中のマイナス、別次元の酷さを兼ね備えた生命体。インフィニットロー・スペック。通称。Sだ。」

「いつか宇宙にも進出！？てか区切るところがおかしい！危ないです！」

「なら - 13 組に行つてこい！恋愛妄執の杉崎鍵！」
インボッシフル・ハーレムキング
マイナス

「どんな能力がありありと分かる過負荷ですね！」

「ま、それでも俺には勝てんがな。顔以外」

「……それ、嫌味っすか？」

「嫌味？何の話だ？」

「そっいえばそういう人でしたよ。あんたは」

何故か、そこはかたなく馬鹿にされた気がする。ホントのことだろーに。

「とにかく、さっさと終わらせましょう」

「りょーかい」

俺達はその後も、バカな話に華を咲かせながら、この日の仕事を終わらせたのだった。

私立碧陽学園生徒会。

そこでは毎日つまらない人間達が楽しい会話を繰り返している。

【第一話「駄弁る生徒会」】（後書き）

と、いうわけで第一話投稿です。

前書きのあれですが、完全な思いつきでやってみました。くりむ以外全員頭いいんじゃない？という意見はあれなんで言わないで下さい。成績に関係ないテストで、心の赴くままに答えた結果、といった感じです。

次回は月曜くらいかな？ではでは。

【第二話〈怪談する生徒会〉】（前書き）

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『（１）得意なことでも失敗してしまうこと』

『（２）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

椎名真冬の答え

『（１）弘法も筆の誤り』

『（２）泣きつ面に蜂』

真儀瑠紗鳥のコメント

正解だ。他にも（１）なら『河童の川流れ』とか『猿も木から落ちる』、（２）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがあるな。国語が得意な椎名（妹）には少し簡単だったか？

杉崎鍵の答え

『（１）俺が選択ミス』

真儀瑠紗鳥のコメント

お前は現実リアルですでにミスりまくってるだろ。

桜野八月の答え

『（１）俺が選択ミス』

真儀瑠紗鳥のコメント

杉崎と全く同じ答えなのに、こちらには共感できてしまつ。そんな

日本語の不思議は置いておいて、今度一緒に競馬場に行こう。お前に任せれば大儲けできる気がする。

紅葉知弦の答え

『（２）薄汚い豚の顔面にローキック』

真儀瑠紗鳥のコメント

それはむしろ褒美だ。私なら金を取るな。

【第二話　怪談する生徒会】

「本当に怖いのは幽霊や化物じゃないの！人間自身なのよ！」

「あー、うん、ですよね」

困った杉崎の曖昧な相槌に、気をよくした様子のくりむ。

「そうなのよ！幽霊も化物も、結局は人間が生み出すからね！」

「いや、それはそーゆー意味じゃねえだろ」

俺の言葉は聞こえていないのか、『こんな考えが出来るなんて、私って大人！』、みたいな態度でふんぞり返ってる。

他の面々も、もうすっかり手馴れたもの。テキトーに感心したふりをしている。

さて、なぜくりむがこんな話を持ち出したのか。それは、最近生徒の間で碧陽学園七不思議なるものが流布しているからだ。

七不思議のお約束として、七個全て知った人間には。というのがあるが、姉がいる守なんかは三十個くらい知ってるらしいし、シアや顧客なんかとよく世間話する俺に至っては、五十個以上知っている。

何で一つの学園にそんなに怪談があるのかも謎だし、七個でどうにかなんなら、俺は身近な人を巻き込むどころか、すれ違うだけで人を不幸のどん底に叩き落す、恐怖の権化にでも成り果てているだろう。

「事態は既に切迫しているわ！」

くりむは、ホワイトボードに「今日の議題・怪談のはびこりすぎな現状について」と極太で書かれている。

こいつは昔っからビビリちゃんだから、今の学園には来るのも嫌な
んだろ。友人と日常会話してたら一日に一回は必ず怪談話に突入
する、そんな今の碧陽には。毎朝ギリギリまで出るのを粘ってるの
も、おそらくそれに関係しているはずだ。

左前では杉崎と深夏が、耳打ちで話している。すると右前の真冬が
小声で問いかけてきた。

「あの一、八月先輩？」

「（ん？どうした？）」

「（会長さん、何であんなに真面目なんですか？）」

「（そりゃあもちろん……）」

「（もちろん？）」

「（お。俺が言うのもなんだな。まあ見てりゃわかるさ。おもしれ
ーぞ）」

俺の目線の先、深夏がすつくと手を上げた。

「はいはい！」

「はい、深夏」

「会長さん、こんな話知ってるか？あるトイレに入った女子の話な
んだけど」

「わ、わわ！な、なんで急にそんな話をつ！脱線させないでよ！」

「脱線じゃねーよ。ほら、対処するには、まず詳しく知るべきだ
ろっ？」

「うぐ。……とにかくっ！私は聞かなくてもいいの！」

くりむの狼狽ぶりに、（俺を含む）メンバー全員の眼が、きゅぴー
んと怪しく輝いた。

『（これは面白いネタになるー！）』『（八月先輩の言うとおりだし

た。面白くなりそうです！」「（相変わらずだなー。ま、今日はこちらから役に徹しましよい）」

皆、くりむの「怖がり」に気付かないふりをして、自分たちのフィールドへとくりむを強制連行すべく行動を起こした。一番迅速だったのは知弦。やべえ、すっげーいい顔してるわ。どんだけS？

「深夏の言う通りね。ええ、その通りだわ。まずは全ての出回っている怪談を一つ一つ確認して、検証する必要があるわね」
「え、ええ！？」

あからさまに動揺するくりむに、杉崎の追い討ち。

「ですね。ここは、それぞれ知っている怪談を語ってみるべきですよ」

「ちょ、杉崎！そんなことする必要なんてまるで——」

「ま、真冬も、やるべきだと思いますっ！」

「真冬ちゃんまで……」

たじろぐくりむが、対角線上に座る俺を見つめる。せめてもの情けだ。兄たる俺が介錯仕ろう。

「おいおい、落ち着けよお前ら」

「あ、兄貴っ！」

救世主を見るかのような眼差し。俺はそれに微笑みかけるように。

「こわがりなくりむちゃんになんてことをするんだい？あとで『俺たちだけで』やるとしようぜ？」
「なっ！？」

方向性を変えた、押しではなく引きでの攻め。するとすぐさま知弦の援護射撃が入る。さっすが俺の親友！

「そうねえ。『大人』な私たちはともかく、アカちゃんにはちょっと厳しすぎたかしら？」
「うう」

続いて杉崎の攻撃！

「すみません会長。俺達だけで話を進めちゃって。駄目ですよ、『子ども』のハーレムメンバーのこともキチンと考えないと」
「むむむ」

そして椎名姉妹で直接攻撃！ダイレクトアタックくりむのライフはもうすぐ0だ！やめる気なんざサラサラねーがな！

「すみませんでした会長さん。さっきの会話は忘れといてください。会長さんがいないときにも勝手にやっておくんで」
「真冬は小学生のころからこういう話好きですけど……あ、ごめんなさい。ついつい小学生と同じレベルで比較しちゃいました」
「うぐっ」

何気に真冬が一番酷いや。

汗だらだらのくりむ。口はへ字で、目はうるうるで、なんか情けない。しかしまだめげないらしく、腕を組んで自信満々に言い放った。

「お、大人のこの私が、怪談なんて怖がるはず、にやいじゃない」

あー、やっぱ楽しいわー。見れば知弦はすっかり恍惚の表情だし、杉崎は何か新しい可能性の扉を開こうとしてるし、椎名姉妹もニヤニヤしてる。

ようやく腹を括ったのか、パンツと長机の上に手を置く。……その手がガクブルで、さらに楽しくなったのは俺だけじゃないはず。

「い、いいわよ、やろうじゃない。怪談。で、でも、そんなに時間があるわけじゃないんだから、せいぜい一人一つぐらいよ?」

「いいぜっ!じゃああたしからいくぞっ」

「え、ええっ、もう?」

「早くした方がいいんだらう?あれ?会長……怖いのか?」
「深夏、始めて」

強がるくりむを、皆で生暖かく見守りながら、ずいっと身を乗り出した深夏の怪談を聞くことになった。

「じゃあ、一番手たるあたしは気合いれていくぞ。覚悟しろよ。

……この学校の家庭科室には、包丁がない。それはなんでか知ってるか?……そう、家庭科準備室の戸棚で、まとめて管理されているからだ。でもさ、よく思い出してみてくれ。家庭科室の調理台下には、ちゃんと、包丁入れるスペースがあるんだよ。普通ならそこに収めておいていいはずなんだ。

調理器具となればほぼ確実に使う器具なのに、授業の度にイチイチ準備室から用意するなんて、面倒なことこの上ないだろう?

ではなぜ、包丁は準備室にあるのか。それは……家庭科室に包丁があつたがために起こった、ある悲劇が原因なんだ」

いつもの深夏のテンションからは考えられない雰囲気醸しながら、低い声で物語を展開する。こいつが真剣に語ると、妙に雰囲気为重

くなるな。あれか。ジャイ。ンが映画版ですごくいいやつに見える、あれの逆みたいなものか。

くりむに至っては、目はキョロキョロしてるわ、腕は組み替えまくるわ、動揺しすぎだ。なのにそれを隠そうと必死なのが、更に深夏の嗜虐心に拍車をかけるとも知らずに。

ニヤリと笑って、くりむを怯えさせてから、深夏は話を再開した。

「昔、ある女生徒……ここでは仮に、くりむちゃんとするが……」

「なんで仮にくりむちゃんとするのよっ！」

涙目でくりむが叫ぶ。しかし深夏は華麗にスルー。

「くりむちゃんは、愛らしい女の子だった。体のメリハリと背丈には若干残念なものがあつたけど、まあ、顔は良かったし、それはそれで需要があつたんだ」

「……なんか、話の設定に悪意を感じるのだけれど」

「で、そのくりむちゃん。バナナが半分しか食べられないくりむちゃん」

「童謡に出てきそうね、くりむちゃん」

「彼女はある日、学校に忘れ物をしてしまったんだ。それに気付いたのは夜中だったのだけれど、それはどうしてもその日のうちに必要なものだった上、家も割合近所だったため、くりむちゃんは学校に取りに行くことにした。」

夜の学校は確かに怖かったけれど、くりむちゃんは今までにも何回かこういうことがあつたため、もう慣れていたんだ。

その日もくりむちゃんは、いつものように忘れ物を取りに行った。そして。

翌日冷たい体となって発見された」

「ひう」

びくんと反応するくりむ。．．．．うまいな。なかなか話し慣
れてるのが分かる、急転直下の展開で人を恐怖させる話術。

本物のくりむちゃんは、「ふ、ふん、それで？」と、本当は聞きた
くないのがありありと分かるのに、見栄を張って続きを促す。

「くりむちゃんは．．．．家庭科室で死んでいたんだ。全身を
滅多刺しにされてね」

「な、なんか、いよいよ、くりむちゃんという名前設定がともイ
ヤなのだけれど．．．．」

くりむちゃん（妹）が青褪めていた。しかし、深夏はガン無視。

「犯人はすぐ捕まった。それは、最近周辺地域で出没していた変質
者だった。学校に侵入して悦に入っていたところに、丁度くりむち
ゃんが出くわしてしまったんだ。．．．．そりゃ、格好の餌食
にもなる。」

当然くりむちゃんは逃げたんだが、どんどん追い詰められ、最終的
に家庭科室に逃げ込んでしまった。でも．．．．それが失敗だ
つたんだな。男はそこが家庭科室であることに気付いて、調理台下
のスペースから包丁を取り出し、そして――」

「．．．．．」

無言のくりむ。意識を閉ざそうと頑張ってるようなので、小さく消
しゴムを千切って額に当ててあげた。

一回咳払いをしたくりむが、深夏を見つめる。

「な、なあんだ。そ、その程度？そんな、過去に殺人事件があつて
包丁が別の場所に移されたってだけじゃあ、別に．．．．」

「いや、違えよ会長さん。包丁が準備室に移されたのは、それが直

接の原因じゃねーんだ」

「え？」

「大変なことがあったんだよ……。事件の後、放課後家庭
科室に残っていた生徒に……………」

「な……………なにが？」

ごくりと唾を飲み込むくりむ。話は佳境だな。

「事件後、放課後家庭科室に残っていた生徒が、また死んだんだ。
……………今度は——」

「今度は？」

溜めに溜めた深夏が、告げる。

「家庭科室中の包丁が全て突き刺さった状態で」

「っ！」

固まってしまったくりむ。深夏の作り出した雰囲気、くりむ以外
もやや緊張する。だが
考えてることは一緒だろう。

（んなわきゃあない）

そんな、猟奇殺人の舞台が自分が通う高校、いや地域にあつたら、
知らないはずがない。

だがくりむはすっかり本気にしてしまい、「そ、その犯人って？」
と真剣^{マジ}になって深夏に訊ねている。こうなりやもう、深夏の手の平の上だ。

「決まってるじゃねーか。それは……………」

「それは……………」

「それは」

そして、生徒会室が静まり返った、その瞬間。

「おまえだっ！」

「ひう！」

予想通りのオチなので、俺達へのダメージは微弱だったのだが、くりむを見れば……………。

「……………」

口から魂が抜けているのが見えるようだ。リアルホラー。

皆でくりむの帰還を待つ。ようやく意識を取り戻すと、「な、なに
よそれは！」。深夏に逆ギレした。

「わ、私が犯人って、そんなわけじゃない！ば、馬鹿にしてえ
っ！」

苦笑する深夏。

「いやいや、そういうことじゃねーよ。つまり、犯人はくりむちゃんだって言いたかったんだ。そう……幽霊となった、くりむちゃんだってな」

「う……」

「とても人間業じゃなかったらしいぜ、その死に方は。全身に包丁がほぼ同時に刺さってたんだとよ。まるで……空中に浮かんだ包丁が、一斉に飛んできたかのように。」

それ以降だよ。家庭科室に包丁が置かれなくなり、準備室で嚴重に保管されるようになったのは。……会長さん。生徒会活動で遅くなる時は気いつけな。もし家庭科の授業で誰かが家庭科室に包丁を置き忘れてしまっていたなら……そして会長さんがなんらかの理由で家庭科室に入ってしまったなら……命の保障は、できねーぜ」

「……」

再度幽体離脱する妹。どんだけ怖かったんだよ。しばらく花畑を彷徨ったあとで、「く、くだらない与太話ね！」だと。

そんな反応しちゃうと……おおう。どうやら手遅れ。みーんなニヤニヤしてた。無論俺もだが。

その後も、俺達は怪談をくりむに聞かせ続けた。勿論、主人公は全員、くりむちゃん（仮）だ。優しいねえ。

真冬が語ったのは、人に憑りついて自殺へ誘う悪霊、『中に居る』の脅威をありありと語って、くりむを怯えさせた。知弦は、数年前に起こった連続殺人事件『顔剥ぎ事件』の真相を、霊的なものと解釈することで全てすっきり解決、というファンタジーと理論の融合という、荒唐無稽なくせにやけに信憑性がありそうという、手のつけられない、説得力ある話を展開。くりむは恐怖のどん底に叩き落

された。

で、俺は、今即興で作り上げた、生徒会室の壁の中に隠された遺体という普通に考えたら嘘ってわかるだろ的な話をした。するとどういうわけか、くりむ以外のやつらも青褪めて、俺が適当に指差した壁のシミをチラチラ見ていた。声を稲川淳。にしたからだろうか？スゲーな。二、あの知弦すら恐れ慄くそのボイス！そこに震える！恐怖するうう！

そして杉崎。

「くりむちゃんという少女がいました。彼女は……。杉崎鍵という少年にメイドとして雇われてしまいました。終わり」
「ひひひひひひっ！」

それでいいのか、お前。

しかし杉崎は止まらない。

「くりむちゃんは必修科目を落としました」

「ひい！」

「くりむちゃんは、失言問題で生徒会長を辞任に追い込まれました」
「ひゃあ！」

「くりむちゃんは、祈り虚しく、その後背は伸びませんでした。」
「いやああああ！」

「くりむちゃんの歯ブラシを、杉崎鍵がベロベロ舐めて、そつと元に戻しました」

「きゃああああああ！」

「くりむちゃんの最後の言葉は、『ふう、危なかったあ』でした」
「油断した！」

「くりむちゃんの人生は、夢オチでした」
「誰の！」

「くりむちゃんは陰で『頭がアレな子』と言われているのに、終ぞ

「気付きませんでした」

「酷いっ！」

「くりむちゃん、実はくりむちゃんじゃありませんでした」

「なんか一番怖いわそれ！」

くりむはすでにノックアウト。

「そんなの死んだ方がマシじゃねえか……」

思わず呟いてしまう。それくらいに（別のベクトルで）恐ろしい話だった。

そんなこんなで一息の休息。すると杉崎が知弦に話しかけるのが聞こえた。

その内容に、俺もつい考え込んでしまう。

怖い話を楽しむのはある意味倒錯した、歪んだ感情、ねえ。

つい、震えるくりむに目をやる。

この、どこまでも純粹に育った少女こそが、本来の人間の姿かもしれない、なんて。

「結局一番怖いのは人間ってことなのかねえ……」

「案外、リー君のいうことが的を射てるかもね」

なんか生徒会室の雰囲気、なんだ、みたいな感じでまとまってきた。うそーん、そんな答えでよかったの？

そして、俺の呟きに一番過敏に反応したのは、何を隠そうくりむであつた。

「ほら、だから言ったでしょう！私が最初に！」

そんな、偉そうに胸を張るくりむに苦笑して、しかしその通りだと

感じる。

「怖えよな・・・・・・・・人間って。意味わかんねえ」

深夏の呟きが妙に大きく生徒会室に響き渡った。

今日の議題の結論。

怖い話の流布を止めるのは、とてもじゃないが無理。

俺が得た教訓

難しい議題ほど、案外答えは単純。

まあ、その後いつも通り残った男二人。元気のなかったくりむが気になるのか、仕事の進みが遅い杉崎。だから俺はある提案をした。そして、二人でありでもないこーでもない議論を重ね、俺が最後にあるところへメールを送信した。数日すれば効果も出るだろう。そう思いながら残った仕事を片付けたのだった。

「なんか急にクラスで怪談聞かなくなったわつ。これも生徒会長の人望の賜物ね！」

二日後、杉崎に嬉しそうに語るくりむの姿があった。三人しかいない生徒会室で、俺は競馬新聞に目を通しながら、耳だけ傾ける。

「でも、なんでこんなに急に沈静化したんだろ。不思議よね、やっぱり」

「沈静化………ね」

「？」

「いえ、なんでも」

そんな会話が聞こえる。やっぱりくりむは学園新聞、というかシア関連の話題を、自動でシャットアウトする目と耳を保持しているらしい。そうじゃなければ、どうやったかなんて想像に難くないはずだから。事実、知弦は何か言いたげな目をしながらも、俺に微笑んでいた。

それに、この沈静化は一時的なものはずだ。なぜなら、この状況を作り出したのが、俺と杉崎だからだ。怖い話は、止めようと思っ

て止まるものじゃない。ならどうするか。

簡単だ。毒をもって毒を制す。広まっている怪い話よりも、さらに強い毒。

怪い話だ。

無邪気に喜ぶくりむを見て、複雑な顔をする杉崎。どうせ『自分がやったことが正しかったのか』とか考えてるんだろう。

俺たちがやったのは至極簡単。あの日の解散後、俺は杉崎にある提案をした。

『どうせ怪談が広まるんなら、俺達に都合がいいもんを広めちまおうじゃねえか』

その結果生み出された怪談を要約すれば、「七不思議を全て知ったら降りかかる呪いは、確かに実在し、そして、他の怪談と同じく進化している」ってことだ。

今七個以上の怪談を知っちまってるとして、まだ何にも起きてないとしても、その先に、更なる「罰」が待ち受ける。そんな怪談。そして終わりのセリフ。

『七個超えたら安全なんて、誰が言っただかなあ！』

これが、俺達作り出した怪談の原型。これを、俺が聞いた信憑性の高い怪談として、シアにリークする。当然新聞部部長にして、新鮮なネタが手に入ればたとえ一人であろうと、その日のうちに新聞を作る彼女のこと。次の日の朝には、それが載った新聞が掲示されていた。

そして彼女のポリシー上、古い情報はすぐに新しいネタに淘汰されるので、その新聞はすぐになくなる。そうして、元ネタに参照できなくなった噂はどうなるか。

一人歩きしだした噂はやがて、さらに悪質な方向に変化していく。とくに怪談なんかはそれが顕著だ。

しかし、そういう変化で原型は変化したとしても、基礎は滅多なことでは壊されない。『七不思議コンプリートの祟り』『七個以降は安全どころか、もっとヤバイ』という二つさえ抑えれば、あとはどうなっても構わない。

結果としては成功。恐らく、軽くでも怖くなった人が増えたんだろう。怪談ブームはなりを潜めた。

「やっぱり楽しい話題が一番だよな。兄貴もそう思うでしょ」

「ああ、そうだな」

くりむの笑顔は得られた。俺はそれだけで満足。この話はおーしまい、だ。

しかし杉崎はそうはいかなかったらしい。

怪談を恐れるくりむのために流した怪談で、知らない誰かを恐怖で

縛る。そんなジレンマに苛まれてるのかねえ？

ま、そいつはあいつの問題。あいつが自分の中で折り合いをつけることだろう。

今度シアに何か奢ってでもやろうか。そんなことを考えながら、他のメンバーが揃うのを待つ、そんな放課後。

ちなみに、例のシミの上にはポスターが張られた。だから創作だつてのに。

【第二話「怪談する生徒会」】（後書き）

ようやく、声や名前だけですがヒロインが出揃いましたよ。テッオです。

予告を無視してフライング投稿です。だってしゃーない。感想が来て嬉しかったんだもん。ってなわけで初感想来ました。DIOさん、ありがとうございます。テンション上がったっす。

感想・指摘があつたら気兼ねなくください。あなたのそれが私の力になるのです。

【第三話】放送する生徒会」（前書き）

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my grandmother had used regularly」

杉崎鍵の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

真儀瑠紗鳥のコメント

正解だ。よく勉強しているようだな。

桜野くりむの答え

「私の愛用はこの本棚に使われるおばあさんです。」

真儀瑠紗鳥のコメント

一体どんな状況だ。ただ単語は理解できているようなので、少しは安心・・・・・・・・・・してはいけないんだろうな。

【第三話　放送する生徒会】

「他人との触れ合いやぶつかり合いがあつてこそ、人は成長していくのよ！」

「何ですか？それ」

杉崎は普通に聞き返していた。うん、俺も意味分かん。

するとくりむは、キュッキュとホワイトボードに議題を書き、「これよ！」の言葉とともにバンツと叩いた。

「ラジオ放送？」

やっぱり意味が分かん。見れば、杉崎以下全員不思議そうな顔をしていた。

「そう！これから生徒会で、ラジオをやるうと思つての！」

「ラジオって………」

うん、嫌な予感がビンビンするわ。同じく何か感じたのか、真冬が若干怯えながら訊ねる。

「あの………ラジオですか？音楽かけたり、喋ったりする………」

「そうよ。その、ラジオ」

「えと。それって………何で生徒会がするんですか？そういうのは、放送部とかの仕事だと、真冬は思っていたのですが………」

全員そう思ってるさ。でもね、たった一人の非常識なトップの前では、そんなもん意味を為さないんだぜ？

「何言ってるの！生徒会って、生徒をまとめる立場にある組織よ！政見放送みたいなものもたまにはしないといけないわ！」

「政見放送なんて言葉、よく知ってたわね。アカちゃん。よしよし、いい子いい子」

頭を撫でられて、一瞬気持ちよさそうに目を細めるも、ハッと我に返り、「うがー！」と手を払いのけた。

「政見放送ぐらい、知ってるよ！子ども扱いしないで！」

「そうね、アカちゃん。ごめんなさいね」

「わ、分かればいいのよ」

「そういや、昨日一緒に見たクイズ番組で、テーマが『政見放送』の問題があつた気が……気のせいかな。うん、気のせい」

「……と、とにかく！政見放送よ！」

俺の独り言に、皆のくりむを見る目が生暖かくなった。触発されすぎだ。

すると右前の深夏が、嘆息交じりに発言した。

「まあ、文句言ってもどうせやるんだろうけどよ……でも、何でラジオなんだ？映像の方がいいんじゃないの？」

「それも考えたけど……放送部に押しかけたら、『今渡せる機材はこれしか……』と泣かれたから、ラジオなの」

そう言っ、てきぱき準備するくりむ。配線なんかをくりむが出来るとは思わないので、おそらく放送部にやらせたんだろう。哀れ、

放送部。

そして全員の前に、マイクスタンドが一つずつ設置された。

「か、完全に準備されちゃってます………」

真冬がうな垂れている。ドンマイ。

状況を諦めて受け入れたところで、ハイテンションなくりむが口を開く。

「ほら。最近は声優さんのラジオも増えたじゃない。美少女がたくさん集まって喋ってれば、皆、大満足のはずよ」

「くりむ。声優やパーソナリティ、そして何よりリスナーを舐めるだろ」

「可愛い声でキャピキャピ喋りあっていれば、男性リスナーなんてコロリと騙されるはずよ」

「謝れ！俺以外の男性に謝れ！」

「杉崎は騙されるんだ……。まあ、それに、六人もいれば会話が尽きることもないでしょう。大丈夫大丈夫。いつも通りに喋ればいいんだから」

「いつも通りといっても………」

「あ、兄貴はいいけど杉崎はあんまり喋らないでね。杉崎は、存在自体が放送コードにひっかかっているから」

「ひでえ！」

まあ、普段の調子で杉崎が喋ると、エロ垂れ流しになるからな。でも杉崎の顔を見る限り、黙る気はねえんだろうな。

そうこうする間に、セッティングは完了。部屋の片隅のノートパソコンから察するに、これは録音放送なんだろう。トラブルの後のフオローは可能だな。

真冬も現実を受け入れたのか、マイクをツンツンしてる。

一方知弦は喉の調整中。やるからには全力でやるようだ。知弦らしいっちらしい。

深夏は落ち着いた雰囲気、腕を組みながら、椅子にふんぞり返っている。

俺は、溜め息を吐きながらも、居住まいを直した。

「さあ、始めるわよ！」

その言葉とともに、手元のスイッチの一つが押された。

O N A I R

会長「桜野くりむの！オールナイト全時空！」

杉崎「放送範囲でけえ！」

♪ オープニングBGM ♪

会長「さあ、始めました。桜野くりむのオールナイト全時空」

八月「夜じゃねえけどな」

会長「この番組は、富士見書房の一家提供でお送りします」

深夏「どうしたんだ、富士見書房………。無駄な投資甚だしいな、おい………」

会長「まあ、ギャラもゼロ円だし、機材も放送枠にもお金かかってないから、スポンサーにしてもらうことは何もないんだけどね」

真冬「じゃあなんで提供を読んだんですか………」

会長「それっぽいじゃない。うん、今のところ、とてもラジオっぽいわ」

真冬「……はあ。いいですけど」

会長「これ、真冬ちゃん！そんなテンションじゃ駄目よ！リスナーは、もつと、こう、女の子の元気な会話を望んでいるんだから！」

真冬「そ、そうでしょうか……」

会長「うん。男子リスナーなんてそんなものだよ」

杉崎「ここらこら！何でリスナーを見下げた発言すんの！？生徒に喧嘩売ってんの！？」

会長「パーソナリティあつての、リスナーじゃない」

杉崎「リスナーあつての、パーソナリティだ！」

深夏「おお、鍵が物凄く真つ当な発言してる！すげえ！ラジオ効果、すげえ！」

会長「……そうね。私が間違ってたわ、杉崎」

杉崎「分かればいいんですよ、分かれば……」

会長「そうよね。やつぱり、ある程度媚びておいた方が得よね。うん、私、大人」

杉崎「だから、そういう発言を堂々としちゃ駄目だつて——」

会長「お便りのコーナー！」

杉崎「無視！？ラジオなのに、言葉のキャッチボール拒否！？」

知弦「それがアカちゃんクオリティ」

杉崎「なんで先輩二人は要所要所でしか喋らないんですか！もつと舵取りして下さいよ！」

二人「……」

杉崎「ラジオで無言はやめましょうよ！」

会長「さて、一通目のお便り」

杉崎「進行重視かつ！会話の流れ無視ですかっ！」

会長「『生徒会の皆さん、こんばつぱー！』はい、こんばつぱー！」

杉崎「え、なにその恥ずかしい挨拶！恒例なの！？」

杉崎以外「こんばつぱー！」

杉崎「俺以外の共通認識！？つか、何で八月先輩まで！？」

八月「大宇宙の意思を感じたのさ……」

杉崎「あれか！？今回は俺アウエーの日か！？」

深夏「それはいつもじゃねーか」

会長「『オールナイト全時空、いつも、楽しく聴いております』ありがとー」

杉崎「嘘だ！第一回放送のはずだ、これは！」

会長「時系列なんて、瑣末な問題よ、杉崎。このラジオにおいてね」

杉崎「さすが『全時空』！」

会長「あと、言い忘れていたけど、一応、生でも放送されているわよ、これ。聴いている人は少ないだろうから、また明日昼休みに校内で流すけど」

杉崎「どおりでメールが来るはずだ！っていうか、じゃあもつと発言に気をつけて下さい！」

会長「はいはい。じゃ、メールの続きね。『ところで、皆さんに質問なのですが、皆さんは、どんな告白をされたら嬉しいでしょう？僕は今、恋をしているのですが、どう告白しようか迷ってます。くりねえ、是非アドバイスお願いします』」

杉崎「『くりねえ』って呼ばれてんだ！こんなにロリのくせに！」

会長「そうねえ……。これは難しい問題ね。でも、恋愛経験豊富な私に言わせれば――」

杉崎「男と手繋いだことさえないくせに……」

会長「手ぐらいあるよっ！」

杉崎「誰ですか！？俺のハーレムメンバーに手を出したのは誰ですか！？」

会長「……兄貴」

杉崎「……あ、ああ！それはそうですよね！すいません、続きどうぞ」

会長「ん、こほん。とにかく、そうね……。普通に告白すればいいと思う」

杉崎「なんかテキトーなアドバイスした——！」

会長「知弦はどう思う？」

知弦「そうね……好きにすればいいんじゃないかしら。私には関係ないし」

杉崎「パーソナリティがリスナーに冷てえ——！」

会長「真冬ちゃんはどう？」

真冬「え？そ、そうですね……。えと……。真冬は……。……わかりません」

杉崎「まさかの『わかりません』発言キタ——！」

会長「深夏は？」

深夏「当たって砕けろ！以上！」

杉崎「もつとリスナーのハートを丁重に扱おうよ！」

会長「ラストは兄貴！」

八月「ん？すまん、なんの話だった？」

杉崎「そもそも参加すらしてなかった——！」

会長「次のお便り。『妹は預かった。返して欲しくば、指定口座に——』……ん？あれ？これ、間違いメールね。ちよつとスツプー、しっかりしてよお！。まったく。……じゃ、次」

杉崎「スルーしていいの！？今の内容、そんな簡単にスルーしていいの！？」

会長「『生徒会の皆さん、こんばつぱー』こんばつぱー」

杉崎以外「こんばつぱー！」

杉崎「だから、何でこれだけ皆ノるの！？いつ打ち合わせしたの！？」

会長「『くりねえ。どうしよう。私、お金が早急に必要で……。』。というのも、うちの妹が誘拐されちゃって、両親が金策に走り回っているんだけど、集まらなくて……。どうしたらいいかなあ——」

杉崎「ディープなお悩みキタ——！——！っていうか、ここにメールする前に、警察に連絡しろよ！それに、間違いなくさつき

のメールに関連してるよな、これ！」

会長「ううん……そうねえ。分かった。ラジオネーム《被害者の家族》さんには、富士見書房とうちの兄貴から《まとまったお金》をプレゼント！待っててね！あ、兄貴には後で返してね。富士見書房はどうでもいいけど」

杉崎「ええええええええ！？用意すんだ！しかも勝手にスポンサーと兄から引き出すんだ！いいんですか、それ！つか、スポンサーすら蔑ろとか、ラジオやる気ないでしょ、アンタ！」

会長「全ては兄貴と富士見書房次第ね」

杉崎「なんでアンタそんなに偉そうなんだ！」

会長「よし、じゃあ、ここで一曲。先日私が出したニューシングル《妹はもう帰ってこない》を聴いていただきますよう」

杉崎「空気読め

も妹——「！」

——「！てか、アンタ

♪ 《妹はもう帰ってこない》フル再生 ♪

会長「さて、聴いていただきましたのは、絶賛発売中のシングル《妹はもう帰ってこない》でした。デビューシングルの《弟は白骨化していた》も合わせてよろしくねー」

杉崎「アンタの過去に一体何があったんだ！」

会長「じゃあ、ここで恒例のコーナー。《椎名姉妹の、姉妹でユリユリ》」

杉崎「……………。……………。……………。……………。……………。……………。……………。……………」

と聴きたいかも」

真冬「先輩！？ちゃんとツツコンで下さいよ、そこは！」

深夏「そうだ！聞いてないぞ、そんなの！」

会長「このコーナーは、リスナーから送られてきた恥ずかしい百合

っぽい脚本を、椎名姉妹は演じるという、人気コーナーです」

杉崎「人気な設定なんだ……。俺が言うことじゃないけど、ここの生徒、大丈夫か？」

会長「私個人的には好きじゃないんだけどね……。ほら、ご機嫌取りよ、ご機嫌取り。これやっておけば、とりあえず、生徒は満足だろうから」

杉崎「だからそういう発言は、本番中にしないで下さい！」

会長「じゃ、椎名姉妹、よろしくー。はい、これ、台本」

真冬「う、うう……。ホントにやるんですか？」

深夏「うわ、なんだこれ！こんなの読んでられっかよ！」

会長「これ深夏！逃げないで！これ乗り越えてこそ、ホンモノの副会長よ！」

杉崎「副会長の資格とまるで関係ないでしょう……。」「

深夏「……。やるしかねーようだな」

杉崎「なんで納得してんの！？」

真冬「真冬も……。覚悟を決めました」

杉崎「何キツカケで！？」

知弦「ふ……。それでこそ椎名姉妹よ」

八月「成長したな、お前ら……。」「

杉崎「アンタらはどうして変なところでだけ、思い出したように発言するんですか！」

二人「……。」「

杉崎「だから黙るなよ！下手すれば放送事故ですよ！」

会長「すでに事故っちゃってる気がするけどね」

杉崎「アンタにだけは言う資格がない！」

会長「とにかく、兄貴も知弦も、きちんと参加してね」

二人「はい」

杉崎「もうこれ、イジメ以外の何物でもないよな！」

会長「じゃ、いってみよー」

杉崎「スルーか――！」

会長「さ、さて、じゃあ、次のコーナー！《杉崎鍵の『殴るなら俺を殴れ！』》」

杉崎「何ですかそのコーナー！」

会長「このコーナーは、校内でもし誰かを殴りそうなほどカッとしてしまったら、とりあえず、杉崎を標的にしましょう、というコーナーです」

杉崎「俺の人権は！？」

会長「生徒のいざこざを解決するのも、生徒会の仕事。というわけで、今日も揉め事がありましたら、二年B組の杉崎までご連絡を――」

杉崎「するな――！」

会長「仕方ないわね……。希望者もないようだし、今日はこのコーナー飛ばすわ」

杉崎「なんで俺の担当だけ、そんなコーナーなんスか……。」「

会長「じゃあ、次のコーナー！《桜野兄妹へのファンレター》！」

八月「お、やっと俺の出番か」

杉崎「明らかに差別してね！？コーナーの格差が激しいですよねえ――！」

会長「まずはこちら。ラジオネーム《B級超能力者》さんからのお便り」

杉崎「何かすげー知ってる気がする。ついでにB級でもよく言いますぎだと思っ」

深夏「奇遇だな、同感だ」

会長「『師匠、かつこよすぎです！いつまでもついていきます！』」

八月「おう、あながと」

杉崎「あー、あいつの言ってる師匠って、八月先輩のことだったのか」

深夏「師弟の絆ってなんか燃えるよな！」

真冬「師弟の絆がいつしか愛情に変わる……。素晴らしい関係ですね！」

杉崎「やっぱり真冬ちゃんは歪んでる！」

会長「続いて、《チート》さんのお便り」

真冬「そのまんまです！一切捻られていません！」

会長「『はづつきーがんばってるかにやー？それはそうとマフー、今度デートしないかにやー？』、だって。マフーこと真冬、そこんどこどうなの？」

真冬「会長さん達のコーナーだと油断してました………というか、八月先輩知り合いだったんですね。えっと、ゲームがしたいのでごめんなさい」

会長「『そうか残念だにやー。ちなみにちーちゃんとはづつきーは親友だにやー。そういえばマフーがやってるゲームって——』」

杉崎「何で普通のメールみたいなことになってるんですか！あと《チート》さん、俺は二十四時間空いてますよ！」

会長「『ごめんなさいwww』」

杉崎「ちくしょ——！」

会長「はい、続いて匿名希望さんからのお便り。こほん。『桜野くりむ様。貴女の可愛らしさを見る度に、僕の心はいつもドキドキときまいて——』」

杉崎「ファンレターと言うより、ラブレターじゃないですか！誰だ！俺の女にちよっかいかけけるヤツは！いい度胸だ！出て来い！俺が相手して——ぐぼあ！」

八月「何言ってるんだ、お前」

杉崎「だ、だって、俺の彼女にラブレターなんて送るヤツがいるから………」

会長「私は杉崎の彼女じゃないよ！ラジオ放送で変なこと言わないの！」

杉崎「すいません。カッとなってやりました。反省はしていません」

会長「なんでそんなにふてぶてしいの！？」

杉崎「うう………。で、でも、その、勘弁して下さい。その会長への手紙のコーナーは俺が嫉妬に狂ってしまっ、耐えられま

せん」

会長「う……………」

深夏「……………」どうでもいいけど、イチャついてないで、早く進めろよ」

八月「俺はくりむルート一本に絞らない限り、認めないからな」

会長「い、イチャついてなんかないわよ！兄貴も深夏も変なこと言わないで！も、もう……………調子狂うわね。こほん……………」

・じゃあ、次のコーナー……………」

真冬「あ、何だかんだ言って先輩の希望通り、手紙読むのやめてくれるんですね」

会長「う……………。と、とにかく、次！《学園 五・七・五》」

杉崎「……………なんか、急に、普通の定番コーナーですね……………」

会長「うん、ネタ切れだからね」

杉崎「言っちゃうんだ！」

会長「このコーナーは、リスナーが考えた、この学園にまつわる面白おかしい五・七・五を、紹介するコーナーです」

杉崎「逆に危機感を抱くほど、ありきたりなコーナーですね」

会長「こほん。では、いきましよう。匿名希望さんからの五・七・五」

『燃えちまえ メラメラ燃えろ 杉崎家』

会長「素晴らしい詩ですね。情景が目には浮かぶようです」

杉崎「……………」

会長「？えつと……………杉崎？」

八月「ほっとけ。どうせその情景がありありと浮かんだんじゃないか？」

知弦「まあ、でも、そうよね。キー君って、そういう立場よね、基本。皆の憧れの美少女達と学園のリーダー格のイケメンがいるコミュニティに在籍してるだけでもアレなのに、その上、自分から『攻略する』だの『ハーレム』だの宣言してるし、リー君にはアカちゃん関連で喧嘩売ってるし………自業自得？」

八月「おい杉崎。ここはリスナーに謝っておけ。今ならまだ間に合う」

杉崎「う、うう……。え、ええい！構うもんか！たとえどんなに脅されても俺は屈しない！ここは俺のハーレムだ！文句あるヤツ、喧嘩なら買っぜ！だから——」

会長「だから？」

杉崎「火、つけるのだけは勘弁して下さい。すいませんでした」

会長「杉崎がラジオなのに泣きながら土下座したところで、次のお便りいこうか。これも……。ええと、匿名希望みたい。こほん」

『金が無い 勢い余って 人さらい』

杉崎「犯人コイツかあ」

会長「え？なに？どういうこと？」

杉崎「いや、だからさっきの誘拐事件の……。い、いえ、そんなことより、コイツの名前と住所！書いてないんですか！」

会長「それはないけど……。追伸で『二万円も要求してやったぜ！』とは書いてあるわ」

杉崎「二万円かよ！安いな、うちの生徒の妹の身代金！なんで両親用意できねーんだよ！」

会長「私に言われても……。杉崎。世の中には、恵まれな
い人もたくさんいるんだよ」

杉崎「そ、そうですね！……何かこの事件……割と浅い気がしてきました」

会長「そんなの誰もが最初から気付いているわよ。まあ、うちはラジオを続けましょう」

杉崎「……収録中って言うか放送中に決着つきそうッスね……誘拐事件」

会長「では、最後の五・七・五です。こほん」

『真面目にさ 仕事をしろよ 生徒会』

杉崎「一般生徒の素直な反応キタ

！」

会長「まったく、失礼しちゃうわよね」

杉崎「いえ……俺が言うのもなんですが、すげえ気持ち分かります」

深夏「あたしも分かる」

真冬「真冬も分かります」

会長「なによ！やるべきことはちゃんとやってるわよ！」

八月「やらなくてもいいこともやってるけどな」

知弦「それも大量にね」

会長「不愉快だわ。このコーナー、終了」

杉崎「そういう態度が駄目なんだと思います！」

会長「さて……じゃあ、そろそろ終わりも近いし、フリートークしましょうか」

杉崎「今までも十分自由でしたけど……」

深夏「お、会長さん。メール来てるみたいです」

会長「え？なにになに？」

真冬「ええと、ですね。『妹が誘拐されていた件ですけど、無事解

決しました』らしいです。良かったですね！」

杉崎「おお．．．．解決したか。良かった良かった」

知弦「．．．．ちっ」

杉崎「すげえ聞こえてますけど、知弦さん。今の舌打ち」

知弦「なんのことかしら」

杉崎「録音&放送されているっていうのに、何その自信満々な開き直り！」

八月「でも．．．．随分あっさり解決しちゃったな。どんな犯人だったんだ？」

真冬「ええと．．．．よく分からないですけど、最終的には、攫われた妹さんが、自分で、犯人を叩きのめしたらしいです。犯人さんは．．．．今、重体です」

杉崎「二万円欲しかっただけの犯人――

――！」

真冬「妹さんも、基本的には犯人さんに遊んで貰っていただけのようですよ。でも．．．．このラジオをたまたま聴いていて、自分が攫われていることに気付いて、慌てて、犯人をボッコボコに．．．．」

杉崎「俺達のせいかつ！」

深夏「結局、何で二万円欲しかったんだ、コイツは．．．．」

真冬「えと．．．．ですね。メールによると．．．．うん、なんか、犯人は意識を失う前、『返済期限が迫ってるから．．．．この子の姉に．．．．貸したままの二万円を．．．．返して欲しかった．．．．だけなのに．．．．八月さん．．．．すみません。ガクリ』と倒れたそうです」

八月「あー、俺の客か」

杉崎「いたたまれね――！　っていうか、諸悪の根源は姉か！　リスナーか！」

真冬「そのリスナーさんから送られてきたメールの最後は、『悪は滅びるのよ！　あつはつ』で締めくくられています」

杉崎「このラジオのリスナーはろくでもないな！」

真冬「ま、まあまあ。一件落着ということで……」

八月「あれだ。返済は次に金が溜まったときでいいぞ」

杉崎「……俺、この放送終わったら、犯人のどこ見舞いに行くわ。助かってくれ……」

会長「こ、こほん。ええと……色々ありましたけど、このラジオも、そろそろ、お別れの時間が来たようです」

杉崎「やっとか……」

短い時間の割に、驚くほどディープだった……」

会長「最後は、『今日の知弦占い』でお別れです。それでは皆さん、また来週」

♪ 神秘的なBGM ♪

知弦「では今日の知弦占いを。」

当校の獅子座のあなた。近日中に、『世にも奇妙な物語』っぽい事態に巻き込まれるでしょう。注意して下さい。タ。リを見かけたら全力で逃げなさい。

ラッキーカラーは『殺意の色』。どす黒いか、真紅か、その辺は各々のイメージに任せます。

ラッキーアイテムは『核』。常に持ち歩けるとなおよし。貴方がメタルギアなら、それも可能となるでしょう。

最後に一言アドバイス。

死なないで

以上、知弦占いでした」

杉崎「怖いですよ！獅子座の人間、今日が終わるまでビクビクですよ！」

知弦「また来週、この時間に会いましょう。……獅子座以外」

杉崎「獅子座あああああああああああああああああああ
あ！」

♪ ED曲《弟は白骨化していた》 ♪

「今日の放送は大好評だったねー！」

今日も今日とて、椅子の上にふんぞり返るくりむ。その顔には、大満足の三文字が書かれているようだ。そして知弦もニヤニヤしている。

しかし、杉崎と椎名姉妹はすっかりくたびれているな。

杉崎と深夏が話し始めるのを見て、真冬が小声で話しかけてきた。

「（八月先輩、結局先輩の教室はどうだったんですか？）」

「（最初の方はまだ笑ってるヤツがいたんだが、最終的には現実逃避するヤツが現れて、獅子座達は咽び泣いてた）」

「（は、ははは。それはカオスですね。でも、何で会長さんはあんなにご機嫌なんですか？）」

「（うちのクラスのヤツらは、まあ、一部おかしいものもいるが基本優しいからな。俺達三人に気を遣って、愛想笑いしてた。そっちはどうだったんだ？）」

「（チートさんや薄野君^{すすきの}、あ、薄野君って言うのは私のクラスのうるさい男子なんですけど、そんな二人を含めたクラスメイトのテンションが下がっていくのが、手に取るかのようにわかりました）」

「（チートのテンションが低いところとか、まったくもって想像できんけどな）」

「（一番酷かったのは秋葉君ですね。悪ぶってるツツコミさんですけど、あまりのオーバーワークに死にそうな目をしてました）」

「（ご苦労なこった）」

と、そこでくりむの魔手が、真冬にまで伸びた。

「真冬ちゃんのクラスでも、人気だったよね！」
「え」

真冬がカチコチに固まった。どう切り抜ける？
真冬はそれはそれは歪な笑みを浮かべ、震えながらも返した。

「は、はい。そ、そうですね・・・言うなれば、スーパー。リオブラザーズにおける、『逆さメット』ぐらい、大人気でしたよ！」

「それは本当に人気と言えるの!？」

うん、嘘さえ言わなきゃ、後ろめたいものはないな。隠れて溜息を吐く真冬を、こっそり労っておいた。

見れば、「そっかそっかぁ」と満足げなくりむ。こりゃあ・・・
・まずったなあ。

「じゃあ、第二回もやらないとねー！」
『・・・・・・・・・・・・・・・・』

さつきまで、ニヤニヤしてた知弦でさえも嘆息している。やっぱ、どんな強靱な精神があっても、シリーズはきついよな。事実、そこまで参ってなかった俺でも、もうやりたいとは思わない。それくら

い
疲れた。

すぐさま、アイコンタクト会議開始。

（どうしますか……。会長、まだやる気ですよ）

（アカちゃんにしては、執着が深いわね……。一回やれば満足するとふんでいたのだけど）

（俺もそう思ってたが……クラスの連中の気遣いが、完全に裏目に出たな）

(どうすんだよ……あたし、もう、あんなの勘弁だぜ)

(真冬も、もう、無理ですう……)

(杉崎、どうにかしろよ)

(む、ムチャぶりますね……。まあ、やってみるッス)

そして俺から大任を承った（押し付けられた）杉崎が、くりむに向き直った。

「会長」

「ん？なあに、杉崎」

「その……ですね。こういうのは、ほら、たまーにやるからこそ、味が出るんじゃないかと」

[illegible]

「つまり、ですね。二回目をやるにしても、ある程度間をおいた方がいいんじゃないかと……」

• • • • •

考え込むくりむ。こちらをチラ見してきた杉崎に、全員でサムズアップしておいた。くりむは、流行に流されやすく、なにより飽きっぽい。これなら、時間さえおけば、すぐに忘れてくれるはずだ。やがて、笑顔でくりむはこう言った。

「そうねっ！このラジオは、クオリティ重視だもんね！」

あれでクオリティが高いとか、低いのなんて想像するのもおぞましいじゃねえか。

「分かったわ、杉崎！次は……そうね。一ヶ月は置いてからにしよう！」

「そうですね」

その言葉に胸を撫で下ろす。

一ヶ月もあれば十分。あとは家で、思考の誘導でもしておけば完璧なはずだ。

そう。完璧なはずだった。
相手がくりむでなければ。

「じゃあ次は、生徒会のPRビデオの撮影にかかりましょう！ようやく、映像用の機械も揃ったのよ！」

ドンツと、硬質な音とともに、俺達の眼前に召喚された、黒い大きなビデオカメラ。

『え？』

くりむがにっこり笑っている。

「さあ、これからが本番よー！」

『……………』

……………。

『いやあああああああああああああああああ
あ！』

獅子座じゃなくても、世にも奇妙的悲劇は降りかかるんだな

【第三話　放送する生徒会】（後書き）

燃え尽きちまったぜ……真っ白にな……。話が長いと、こんなにてこずるとは思ってもみませんでした……。でもがんばります。

もう投稿日の予告なんかしないと誓った春の日。自分で言っというただけ、何かもう守る気微塵もないし。書けたらその日か次の日に載せます。

次は【更生する生徒会】の予定。オリ話は一卷分書き上げてからかな？

書いてて真冬がメインヒロインに見えます。違うからね！フリでもなんでもなく。でも全然うちのヒロインズが出せない！だって二人とも役員じゃないから！本当は片方は悩んだんですけどね。さすがに七人は回せません。オリ話を待って下さい。

そして出てきた八月の弟子と親友。隠す気なんぞ全くございません。これもオリ話が初登場になるかな？弟子の方はもしかしたら二年B組の話までかも。

意見・感想待ってます！

【ご協力お願いします】

急ですが、一巻分書き終えたら始める、【番外章】三年A組の騒々しく登場させる、オリジナルクラスメイトを募集します。

おそらく原作でもいつかやるでしょうが、こっちはこっちで勝手にやっちまおうぜ、って感じです。

宇宙姉弟や中目黒、秋葉君にも負けない個性的なキャラをお願いします！

採用人数は一二人です。ヒロインの学年都合上、あんまり多くは回せないんで。

出来れば男がいいかな？でも魅力的なキャラなら、んなもん関係なく採用なんで、あんまり気にしないで下さい。

×切は、【第七話】振り返る生徒会】投稿までです。皆さんのアイデア待ってます！

指摘があつたので追加です。アイデアは感想に送って下さい。

【一万PV突破記念！観察される会計！】（前書き）

碧陽学園新聞 特集号

『俺は、過去の後悔を二度と味わいたくない、その一心で日夜ハーレムを築こうと尽力してきた。そのためなら、どんな汚名だって被る気だった。』

今、俺は過去の俺にこのことを教えたいと思う。それが、ハーレムキングたる俺の責務だ。

過去の俺……これが、ハーレムを目指すってことだぜ。覚悟はいいか？俺は心が折れそうだ』

以上、

『男の敵ランキング1位』

『こいつにだけは変態と言われたくない生徒ランキング1位』

『とりあえず殴っておきたい生徒ランキング1位』

『近づかないで！妊娠しちゃうじゃない！と、女子が心の中で思う男子ランキング1位』

の四冠を達成した、杉崎鍵のコメントでしたわ。

ちなみに、取材を予定していた、

『鈍感王ランキング1位』

『理想のお兄さんランキング1位』

『この人になら抱かれてもいい！ランキングin男子1位』

『漢の中の漢ランキング2位』（1位椎名深夏）

の3・5冠を達成した、桜野八月は肩も、ん、んん！所用のため聞き出せませんでしたわ。

【一万PV突破記念！観察される会計！】

『あーてすてす。トントン。マイクは無いけど気分よ、気分って大事！うん、私分かつてる。……。こほん。私はさく、潜入のぶりふえつしよなる「クリーム」よ。今日は、生徒会誌の特集に載せるために、一日の兄貴の動きを観察するわ。べ、別に、知弦と杉崎にお菓子で釣られたりなんかしてないんだからねっ！』

AM 7:15

完璧な私の朝は、小鳥がさえずる夜明け……。から二時間くらい経ったときに、御付のメイド……。よりもハイスペックな兄貴からの、優しく揺すられたのちお姫様抱っこ……。をされたいお年頃の娘に対する、毛布を剥がしてベッドから突き落とすという暴挙から逃げることで始まるの。

え？私のことはいい、兄貴の寝起きはどうなんだ、ですって？知らないわよ。だって兄貴より早く起きたことなんてないもの。というか、小学校高学年の辺りからは、お母さんでさえ寝起きを見れなくなっただけだよ。

AM 7:30

まあ、華麗な私の朝を思いがけずに見れたことが嬉しいのは分かるけど、興奮しないで次行くわよ。

そうして起きた私は、テーブルに着くと、まず一杯のコーヒー……。牛乳を飲むの。兄貴は生意気にもブラックよ。かつこつけちゃってこのこの、ってからかったら、その日の水筒の中身がお茶じゃなくてコーヒーになってた。ぶるぶる。

その後、セーヌ川を臨むオシャレなカフェテリア……。のテ

レビ中継を皆で見で、本場の焼きたてフランスパン・・・を越えたと言っても過言ではない甘い菓子パンを、ナイスバディなアメリカ人女性・・・に逆ナンされたことがあるらしい（リリシア情報）兄貴と、イケてるフランス人男性・・・と一度すれ違ったことがあると語る母（38歳）と食べて、朝の優雅な一時を楽しむのよ。

え、途中から私の観察日記になってる？何よ、せっかく私自らこの世界一の美貌の秘密についてを語りつくしてあげようと思ったのに！本にしたら一兆部は売れるベストセラーになること間違いなしの、素晴らしい内容なのに、興味ないって言うのね。・・・いいわよ！ならもう聞かせてあげない！一生聞けなくて後悔するに決まってるのに、本当にいいのね！・・・、・・・え？ほんとに・・・いいの？い、今ならまだセーフよ！どう？今忙しいなら明日でも・・・。

・・・しゅん。

AM 8:00

ご飯を食べて着替えた私は、兄貴と一緒に家を出る。ここからは大して面白いことが無かったので割愛。ひかれそうな子供を助けたとか、不良の集団に絡まれた女の子を私を小脇に抱えた状態で助け出したとか、謎の喋るボロボロの白オコジヨを保健センターに引き渡したりとか、他にもいろいろあったけど、いつものことなので割愛！べ、別に面倒だからじゃないんだからね！

はい、知弦。頼まれた分は終わったからチヨコちゃん！だい！あ、後は知弦に任せたわよ！

AM 8:30

全然仕事してないくせに、慣れないツンデレで人気を取ろうとする黒いアカちゃん「そんなこと思っていないよ！？え、ちょ、ちづ！」「うるさいわね。ちよつと静かにしててね。「え？まつ、んーん！んー！」に、チヨコだけ強奪された紅葉知弦よ。

割愛した部分があまりにも濃すぎる気もするけど、気にしない方針で行くわ。だってリー君だもの。そんなセリフがリアルで通用するのも大概だけだね。

アカちゃんと一緒に教室に入ってきたリー君。たまに、私やリコちゃんとかち合って一緒に登校することもあるけど、大抵は別々ね。リー君はクラスでも中心的な存在。深夏のように学級委員を兼任しているわけでもないけど、意見が割れたりしたときは彼の意見で決着がつくことも多い。不思議と彼の意見は受け入れられるのよね。これって一種の才能だと思う。

他にも、相談ごとなんかを親身になつて聞いたり、困ってる人を見たらお節介を焼いて手伝ったりと、そんなことばかりしているせいでいつの間にか、『全校生徒の兄貴』なんて陰では呼ばれてる。くすつ、一人だけでも手のかかる妹を抱えてるのに、総勢千人近い弟妹か。大変ね。

話は逸れたけど、観察を続けるわ。

一通りの挨拶を交わした彼は、基本的に朝から競馬新聞を熟読する。この際、普段は一切使わない無駄な200以上のIQをフル活用して、万馬券を探しているそうよ。本当に無駄この上無いわね。

ここでHR前の時間は終了。一応話は聞いているみたい。でも、それと同時に進行で、さっき読んだ競馬新聞を脳内再生しているのを私は知っている。っていうか、ギャンブル限定とは言え平行思考ってどこのスパコンよ。

その後も、授業をまともに聞いている様子は無かったことを記しておくわ。

P M 0 : 1 5

お昼。私とアカちゃん、リコちゃんとリー君の四人で一緒に取るのが、三年間ずっと続いている習慣ね。いつもだったら会話が弾む楽しい食事になるはずだけど……今日は違った。

忘れてた……いえ、忘れたかったのよ。

昨日私たちを巻き込んで発生したアカちゃんのわがまま。そう、ラジオ放送を今日流すって言ったのを。

詳しくは語らないわ。第三話を見れば何があったかは分かると思うから。でも、私はもう限界。なので、次へバトンを託そうと思う。がんばって、リコちゃん。

P M 1 : 3 0

いきなり指名されてしまった栗花落杏子です。突然ちーちゃんに、「リコちゃんなら出来るわ……頼んだわよ」って言われながら握手されたので、頑張ろうと思います。

でも何を？と思ったら、アカちゃんが教えてくれました。

はーくんを観察し続ければいいそう……え？は、はははは、はーくんを視姦するんですか！？あ、朝から二人は何をしていたんでしょうか？

と、とにかくはーくんを観察して、その行動をメモする……はーくん、何をやってたんでしょう？そして、何で私はこんな探偵まがいなことをやっているんでしょう？いまいちわからなくなりました。

今の私があるのは、はーくんのおかげと言っても過言じゃありませんし、今でも、ネットが苦手で流行に疎い私にいろいろと教えてくれるんですよ。この前なんか、今世間で一番流行ってるアニメ、ガンダ。SEEDについていろいろ教えてくれたんですから！でも、それをくーちゃんたちに話したら、遠い目をしてましたね。どうし

てでしょう。

とにかく、はーくんは私の初めてのお友達で、恩人で、は、初恋の人で……あー、もう！無し！今の無しです！

ま、まあ、今はーくんは絶賛睡眠中です。私は隣の席なので、じつくりばつちり眺められます。でも、どうしてこうあどけない顔なんでしょう？やっぱり血でしょうか？桜野家って家族全員、性格なり生活なり、どこか子供っぽいところがありますしね。思わずつつきたくなりますが、ここは我慢ですね。今までの経験上、大抵触れる瞬間に目が覚めますから。貴方はどこの武人なんですか。

P M 3 : 3 0

生徒会室に向かおうとしたはーくんを、隣のクラスのリリシアさんが呼び止めました。

彼女はどうかやははーくんの幼馴染らしく……どう見てもその目は、恋する乙女のそれです。なんだかモヤモヤしますね。『病弱』の『薄幸』美少女——美少女なのは変わってませんよ？——というアドバンテージを失った、おっぱいが大きくて顔がいい地味子の私に、『金髪』『お嬢様』の『幼馴染』という、鉄板に王道を配合したハイランク属性を保持する彼女と戦って、勝ち目はあるんでしょうか？やはり、もう少しキャラを濃くしたいですね。

そんなことを考えているうちに、リリシアさんに連れられてはーくんはどこかに行ってしまった！

本来なら何を差し置いても向かうのですが、残念ながら今日は『安全運転紅蓮隊』の集会があるので、ヘッドである私は遅れるわけには行かないんです！と、いうことで、適当にその辺の男の子に任せることになります。あ、終わったらちーちゃんに報告しておいて下さいね。

んじゃ、今から風になってくるぜえ——！ひゃつはあ

P
M
3
:
4
0

れていた。

そんなわけで、桜野八月の一番弟子の宇宙守だ。どんなわけかは聞くな。知らん。

会話を盗み聞きなんて手馴れたものだぜ。現在俺は新聞部室の前。
ということであらう。

「いいいですこと？これは、二人だけの秘密ですわよ……」

「そ、そんな……ん！あ、ああ」

ふあ

[illegible]

え、ちよ、ええ ええええええええええええええええ
えええええええええ！？

し、ししょおおおおおおお！な、何してんの！？ナニしてんの？

いや、いやいやいやいやいやい。いつの間にかひっくり返ったが、冷静になれ。K O O Lになれよ宇宙守！あの『桜野八月』だぞ？世紀末鈍感王と名高い、生けとし生けるすべての男の敵、主人公補正『ん？俺がモテる？はっ、ないないwww』の持ち主だぞ！そ、それが！こんな放課後の部室で、二人きりでニヤンニヤンだとおおお！

．．．．．うん、そうだ。これは風紀の乱れを許せない、善良無垢な一般生徒たる俺に与えられた使命なんだ。美少女のくんずほぐれつがどうかうとか一切関係ないんだ。きつと俺の力はこの日のためにあつたんだ！

俺は、学校の風紀のために、渋々、嫌々、仕方なく、透視を使った。

P M 3 : 4 5

ん？結果？

キングクリムゾン使った時点で気づけよ！俺達は騙されたんだよ！普通に肩を揉んでただけでしたよ！硬いのは藤堂先輩の、取材で凝った肩でしたよおおお！

P M 4 : 0 0

血涙を流しながら、守がレポートを持ってきた。なぜ？

てか、無関係な人間二人巻き込んでるよ先輩方。まあ、一応一日分の結果があるので、レポートを見ながら本日の反省をする。

司会は俺、『モテるためにはどうすればいいか延々と悩んでたけど、

実際にモテる人を探ればいいんじゃない？あ、俺はすでにモテモテだ
けどね』会会長の杉崎鍵だ。

では、早速今回の成果を拝見するか。

・・・・・・・・・・。

うん。色々言いたいことだらけだが、もうすぐ先輩が来るので総評。

『会長、もっと真面目にやって下さいよ』

以上。

【第四話】更生する生徒会（前書き）

問 以下の問いに答えなさい

『(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を一つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、 $?$ の中から選りなさい

? $\sin A + \cos B$

? $\sin A - \cos B$

? $\sin A \cos B$

? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$

$\sin B$

椎名深夏の答え

『(1) $X = \pi/6$

(2) ?

』

真儀瑠紗鳥のコメント

そうだな。角度を『 π 』ではなく『 π 』で書いてあるし、完璧だ。

流石は、見た目と得意教科がミスマッチなことに定評がある椎名（姉）だな。

桜野くりむの答え

『(2) ?

』

真儀瑠紗鳥のコメント

お前の名前を見た瞬間にバツにってしまった。反省も後悔もしていないので謝らないが。

【第四話　更生する生徒会】

「人生やり直すのに、遅すぎることはないのよ！」

またもや本の受け売りを偉そうに語るくりむ。

すると何をトチ狂ったのか、どう考えてもくりむに言葉の矛先を向けられている杉崎が、「そうっすね」と、同意した。

「貴方に言っているのよっ、杉崎！」

ビシッと人差し指を杉崎に突きつけるくりむ。俺は筆箱から消しゴムを取り出し、今回は千切らずに投げた。

「うにゃっ！」

「人を指差しちゃいけません！何回言わせるのアンタはもー！」

「わっ、八月先輩がお母さんみたいです」

「お母さんってよりは、オカン？」

ふと見れば、いつの間にか深夏が杉崎をチョークスリップしていた。

「確かにこいつ、早急に人生をやり直す必要があるよなー」

くりむに返しながら、なおも力を込める。少し苦しそうだ。

「いいわね。今のキー君もいいけど、更生したキー君というものにも少し興味があるわ」

「ちよ、更生って！俺は元から超真面目人間——」

言った瞬間、さらに深夏の腕に力が入る。すでに杉崎の顔面は土気

色だ。タップも完璧に無視。そろそろ口を出すかな。

「おい深夏、杉崎が苦しそうだぞー。そんな中途半端な締めは、杉崎を無意味に苦しめるだけだ」

「ご、ごほっ、せ、先輩！」

「仕留めるときは、腹部をえぐりこむようにっ！」

「うつべし！」

「ぐへ！」

さすが深夏。俺がやってほしかったことを平然とやってのけたぜ。でもさ……

「うつべし！うつべし！うつべし！」

「くぴよ！ぴゃふゆ！こば！」

そろそろやめてやってもいいんじゃないか？

「りきい。iiiiiiii！」

「じょごまぬごっう！」

ラストにいい一発をもらった杉崎は、そのまま壁に飛んでいき、物言わぬ屍になった。

「……おい？鍵？あれ？殺っちゃった？」

「『やつちゃった』ってなに！？お姉ちゃん！？」

「おいおい、いくら人生やり直せったって、終わらせちゃダメだろ」

「ごめんごめん。ま、ここは会長責任で」

「いやよ！殺ったの深夏じゃない！」

「くりむ。部下の失態は上司の責任だ。まあ、腹括れ」

「ほとんど全部兄貴の指示だったと記憶してるのだけどっ！？」

「それにしても生徒会で初の死人ね．．．．．まさかこういう展開になるとは想定していなかったわ．．．．．仕方ない。隠しましょう。五人で。ここからは、桐野夏生の『O.T』的展開で読者を獲得していきましょう．．．．．ふふふ。腕が鳴るわ」

「ったく、めんどくさいことになったな．．．．．だけど仕方ないか、ここからはR-18指定タイムだ。いつそ逝きつくともまだ逝っちまおうぜ．．．．．ははは。俄然やる気が沸いてきた」

「ち、知弦？兄貴？そんなに顔が生き生きしているの、初めて見るんだけど．．．．．てか、兄貴に至ってはキャラが若干じゃないくらい変わってる感があるんだけど．．．．．」

「仕方ないぜ会長さん。何たって三ヶ月ぶりだからな。作者もいまいちどんなキャラだったか覚えてないんだよ」

「お、お姉ちゃん！それは言わない約束です！」

「さ、リー君。まずどこから手をつけましょうか？」

「そうさな．．．．．まずは一番ばらしやすい四肢から切断――」

「あ、生き返った．．．．．つまんねーの」

「軽くなー！俺の生死の扱い、軽くなー！」

「隠し通す自信あったのに．．．．．」

「いい埋め場所あったんだが……」
『はあ……』

溜息をつきながら、知弦はのこぎりを。俺はかなづちを。それぞれ元あった場所に片付けた。

「よ、良かったです」

「ま……真冬ちゃん」

「お姉ちゃんが人殺しにならなくて、本当に良かったです」
「そっち!？」

無邪気な攻撃に晒されて傷ついた様子の杉崎が、助けを求めるようにくりむを見た。くりむは……杉崎を真剣に見つめていた。

「会長……」

「杉崎……」

文章にして見れば、物凄くいい雰囲気だ。しかし現実を見れば、くりむの表情は、そういう方向の真剣じゃあない。だから安心して見てられる。

「……ボクは、死にません。貴女が、好きだから」

「……杉崎……はあ」

「？」

唇を突き出す杉崎を見て、くりむが大きく溜息をつく。そして、深く着席して、もう一度溜息。

「あ、やっぱりファーストキスは、二人きりが良かったですか？」

「……はあ。ちょっとは期待したんだけどなあ」

「？キスですか？いえ、俺のほうは準備万たもげら！」

「はい、セクハラタイムしゅーりょー。ここからは八月お兄さん
アーンど知弦お姉さんのドキドキワクワク折檻タイム！」

「あら、楽しそうね」

「違う意味でドキドキー！勘弁して下さい！」

泣きながら土下座する杉崎。

「はあ………。『馬鹿は死ななきゃ治らない』って嘘だった
のね」

「残念ながら、現実には『馬鹿は死んでも治らない』なんだよ、くり
む。いい勉強になったろ？」

「うん。杉崎に即急な更生が必要だってことが、よくわかった。
腐っても副会長なんだから、相応の威厳を身に着けるべきよ」

「……威厳、ねえ」

杉崎の声に釣られて全員がくりむを見る。嘆息する杉崎。俺たちも
思わず苦笑してしまった。

視線に気付いたくりむが、誤魔化すように咳払いをするくりむ。

「と、に、か、く！今日は杉崎の性格を改善しましょう！それがい
いわ！」

「どうしたんですか、急に。そんなこと言い出すなんて」

「これよ！」

くりむがカバンから突き出したそれを、深夏が声に出して読み上げ
る。

「なにになに？『速報！生徒会副会長・杉崎鍵は、昔二股をかけてい
た！』だあ？」

「あらあら、大変ねえ、キー君」

「知弦、楽しそうだなあ。
・ ・ ・ ・ ・
ぷっ」

「酷い記事です！抗議しないとっ！す、杉崎先輩はそんなことする人じゃあ……。。……………」

「ごめんなさい」

全員の反応を確認した後、くりむがまたも指差した。

「てい」

消しゴム弾発射！

「あつ」

目標に炸裂！

「何度同じこと言えば気が済むの！ ホントにアンタはもー！」

「ごごごめんなしやい、お母さん！もうしましえん！」

「お母さんじゃねえ。兄貴だ」

「いきなりキャラ戻さないでくれるっ！？ノッた私がアレじゃない！！」

おでこをさすつた後で机の上の新聞を指差し、杉崎に追求の視線を向ける。

「と、に、か、く！よりもよってリリシアなんかこんな記事すっぱ抜かれて！」

「よりもよつてもなにも、こんなことする人が一人もいてたまりますか」

「杉崎！本当かどうか、まずははっきりさせるわよ！」

「あ、会長もしかして……」

「杉崎。こういうときのくりむは頑だからよ。逃げは効かねえぜ？」

「うっ！そ、そんなことしませんよ」

この反応は凶星か。

はあ、と大きく溜息をついてから真っ直ぐ前を見据えた杉崎が、こう言った。

「結論から言つて、事実です。俺は、昔、二股かけてました」

「そう……で？」

いつものノリで冷やかすこともなく、展開だけを見守る。責める声は一つもなかった。

「杉崎は、詳しい経緯を話す気あるの？」

「いえ。今はちょっと、勘弁して下さい」

「はあ……。でも、事実なのね」

「はい」

「弁解する気は？」

「ありません」

「そう」

「はい」

「……ん、わかった。じゃ、この件はこれでおしまいっ！んー！じゃ、杉崎！早速更生のために色々するわよ！生徒会の威厳を保つために！」

「……そうですね。まあ、更生というより、表面を取り繕

うぐらいはしましうかね」

「ま、真冬も、杉崎先輩はもうちよつと気をつけた方がいいと思いますっ！」

「そうだぜー、鍵。お前、ここだけじゃなくて、日常生活からして美少女追い掛け回しているだろ？そりゃゴシップ記事が出ない方がおかしいぜ」

「こんなことでケチつけられちゃ、それこそつまらないわよ。キー君。ハーレム保ちたいなら、ちよつとガード固めるぐらいはしないと」

「だがまあ、外の守りばかりにかまけて、中の対応をおろそかになんかしたら、リアル nice boat になりそうだがな」

本人が拒絶したことには、決して深入りし過ぎない。それが、この生徒会室の暗黙の了解。居心地がいいぬるま湯を作るためのルールだ。

「でもまあ……………」

「しょうがないなあ。皆がそんなに俺を求めているなら、俺も、つまらないことで足元掬われないうちに気をつけてみますかあ」

「いや、さつきも言ったけど、生徒会のイメージの問題よ？杉崎は別にどうでも」

「ふふふ、分かってますって、会長。会長がツンなのは、十分に理解——」

「いや、本気で」

「……………」

杉崎がいなくなるっていうのも、虫が消えて存外……………。そんな視線に気づかれたのか、杉崎が慌てて話題転換をした。

「で、更生って、具体的には何をするんです？」

「ふむ」

ここから、生徒会一同による「杉崎更生議会」がスタート。
トップバッターくりむは、杉崎の欠点を責めてるうちに、いつもの調子で杉崎のペースに乗せられてダウン。いつもよりは頑張っていた。

続く椎名姉妹の波状攻撃の前に、今度は杉崎がノックアウト。

そして、順番は、俺たち三年コンビに回ってきた。

「キー君の更生は、そんな生易しいものじゃダメよ。ね？リー君」
「そうだな。ここは心を鬼にして、ドギツイのをお見舞いすべきだと思うぜ。な？知弦」

「え．．．．．えと。せ、先輩方、なんかいい案でも？」

「ええ。まずは．．．．．そうね。この、科学部に作らせた『視線感知眼鏡』をちよつと改造して装着させて、キー君が女性の胸等を見たら即座に電流が流れるように．．．．．」

「いつの時代の荒療治ですかっ！」

「古代ギリシアの、とある．．．．．」

「スパルタでしょう！それ、スパルタって言うんでしょう！」

「あら心外ね。愛の鞭と言ってほしいものだね。鞭よ、鞭。美少女の鞭よ」

「いくら俺でも、こんな状況じゃ興奮しませんよ！」

「じゃ、俺の案だ」

「そこはかとなく、嫌な予感しかしないんですが」

「杉崎に近づかれたら魔法の言葉を唱えてもらうように、とりあえず校内の女子に頼むんだ」

「魔法の言葉．．．．．？」

「ああ。『この人痴漢です！』って．．．．．」

「確かに魔法——！ただしザラキ。マ——！なし
なし！絶対なしです！」

「でも確実に更生できるぞ？本場で」

「ムシヨは勘弁して下せえー!!」

「それじゃ、私の二つ目の案聞く？」

「あるんですか？」

「ええ、まずは、女性を見ると言い知れぬ恐怖心が湧き上がってくるという催眠術で——」

「ネクスト！八月先輩！ネクストアイデアを！」

「なら、女性を見ると常に賢者のような心持ちになるという催眠術を——」

「知弦さん！三つ目に行つて下さい！」

「じゃあ、とりあえず去勢手術を——」

「八月先輩！」

「女に飢えた囚人の牢に——」

「わぁん！どんどん非人道的になつてくー！」

言いたいことは言つたので、俺も知弦も恍惚の溜息をついたあと、知弦は勉強、俺は競馬新聞の熟読に、それぞれ精を出すことにした。そして数分後、ふと耳を杉崎たちのほうに傾ける。

「でも俺、ここにいる頭のおかしいメンバー、大好きだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何でいきなり頭がおかしいとか言われているのか、皆目見当もつかないが、これだけは言わしてもらおう。

「うつわー。ハーレム志望で男色とか・・・・・・・・ないわあー」

「え、ちょ、八月先輩！？何でこのタイミングで聞いてるんですか！？さつきいくら話しかけてもスルーだったのに!？」

「あ、すいません。俺、そっちの気はないんで。話しかけないで下さい」

「先輩が余所余所しい——！」

ほら、今言ったとおりだから。だから真冬は期待したような顔でこっち見んな。

「ええと、それで俺、明日からどうします？」

杉崎のその言葉に、皆が微笑だけして、また自分の趣味に戻った。

後日、「もうすけす。見る見るは勘弁ですわー！」という女性の悲鳴と、「ははははは！十回連続で出来るまで新聞は発禁だ！」という悪人のような男の声が、新聞部の部室から学園中に響いたという。

【第四話「更生する生徒会」】（後書き）

本っ当に、遅れてすいませんでした！ようやく第四話投稿です！

これからも亀更新だとは思いますが、よろしくお願いします！

それと、少し思ふことがあってキャラ設定は削除しました。ご了承下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1349s/>

碧陽学園生徒会異文録 ～生徒会の天災～

2011年11月16日10時47分発行